

山形県下一農村における出稼の実態

——東置賜郡和郷村沖郷地区——

中 野 三 郎

農村からの出稼は、全国的にみて昭和36年から急増して、農村の“地すべりの変動”を強力に推進するものとして大きな社会問題としてクローズアップしてきた。

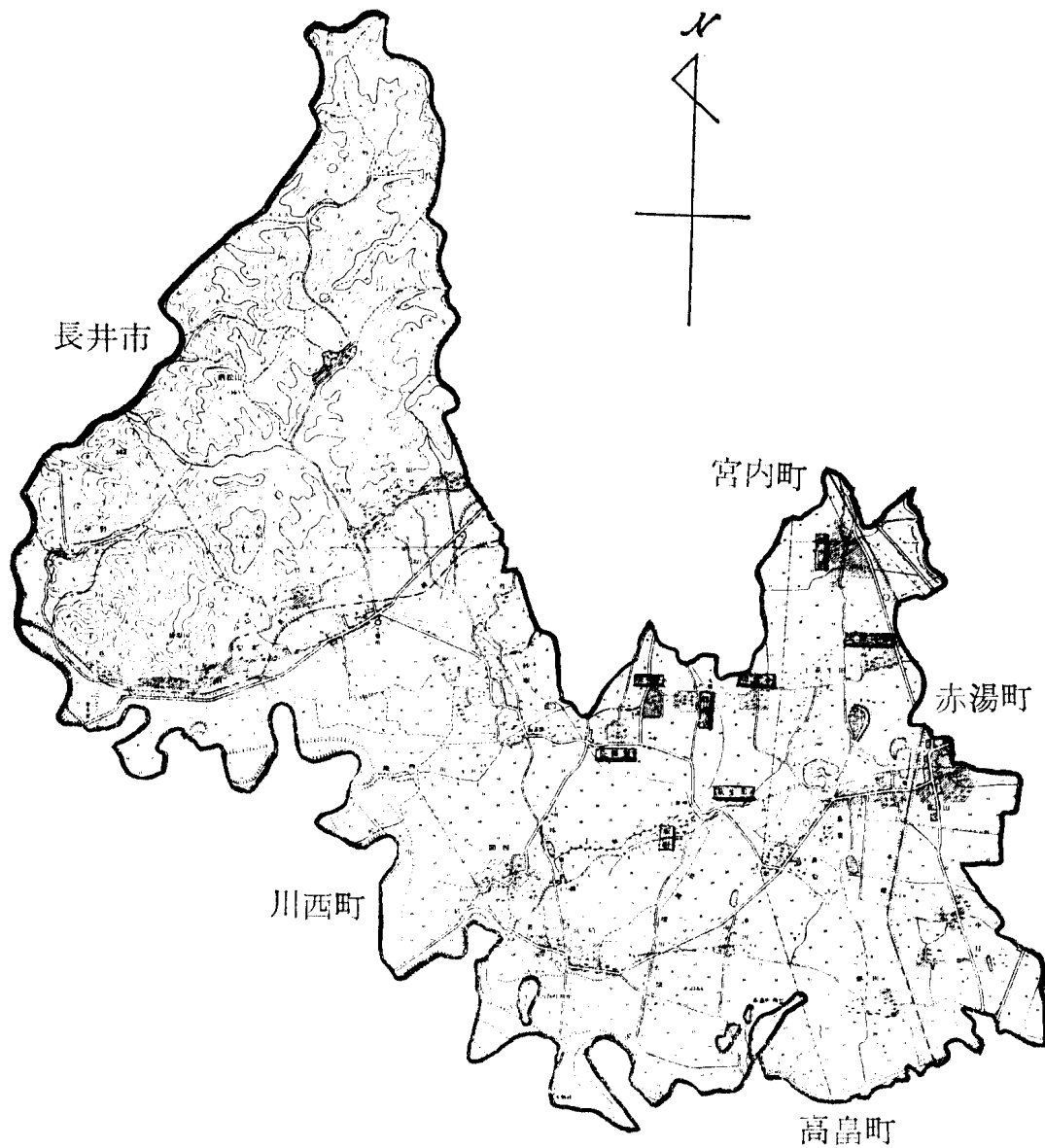
全国的にみて、出稼が顕著な地域としては、まず東北地方が挙げられる。そこで東北農村における出稼の実態調査研究の一環として、手始めに山形県を選び、さらに調査地点として県下の出稼地帯の一つに数えられている東置賜郡和郷村内の沖郷地区を選定した。沖郷地区は旧沖郷村であり、19部落を数えるが、そのうち、出稼者を多く出している蒲生田、法師柳、坂井の3部落をはじめ都合8部落を選定して調査を実施した。

和郷村は置賜盆地のやや北部に位し、沖郷地区は平野部に属し、リンゴの栽培も部分的に行われているが、大部分は水稻の単作地帯である。

昨年11月上旬、4日間にわたり、本地区の農家の主婦（世帯主の妻と規定）を対象にして、出稼の実情および出稼農家と非出稼農家それぞれ全戸について、季節出稼に対する態度、意識および出稼のもたらす社会的影響を調査の主要な狙いとして、調査票による面接調査を実施し、それについて集計分析した結果と、併せて出稼経験者数名に対して聴取調査を行った模様について報告したい。

そこで、われわれの行った沖郷地区の調査結果の分析に先立って、まず、和

和 郷 村 全 図



郷村における農家の季節出稼者の推移をみれば、次表の如くである。

第1表 和郷村における農家の季節出稼者の推移 (農林統計より)

項目	年次	30	32	35	37	38	39
a 総農家戸数	戸	1,175	1,169	1,164	1,168	1,164	1,158
b 季節出稼ぎ農家数	戸	47	76	77 (推定 350)		307	391
c 季節出稼ぎ者数	人	(推定 50)	80 (推定 80)		355	316	406
d 出稼ぎ農家率	$\frac{b}{a} \times 100$ %	4.0	6.5	6.6	30.8	26.4	33.8

これによってみれば、昭和35年を境として、季節出稼農家数、出稼者数はいづれも急増し、従って、出稼農家率も急激に高まり、39年には33.8%にも達し、県下でも有数の出稼地帯になったことが分る。

第2表

年次	項目	階層	階層										総計	
			3反未満	3反~5	5~7	7~10	10~12	12~15	15~20	20~25	25~30	30反以上		
38、 2、 1	総農家戸数	戸 a	91	122	101	199	125	163	215	104	29	151,164	戸	
	農業従事者数(男子のみ)	人 b	76	114	126	274	193	277	382	185	55	351,717	人	
	出稼者のいる農家数	戸 c	20	25	30	87	43	48	41	12	—	1	307	戸
	出稼者数	人 d	20	25	30	89	45	50	43	13	—	1	316	人
	出稼農家率 $\frac{c}{a} \times 100$	%	22.0	20.5	29.7	43.7	34.4	29.4	19.1	11.5	—	6.6	26.4	%
	$\frac{d}{b} \times 100$	%	26.3	20.4	24.6	32.5	23.3	18.1	11.2	7.0	—	2.9	18.4	%
39、 2、 1	総農家戸数	戸 a	87	120	101	199	121	167	218	98	31	161,158	戸	
	農業従事者数(男子のみ)	人 b	81	114	115	256	181	273	355	169	55	301,629	人	
	出稼者のいる農家数	戸 c	23	31	42	95	49	71	62	14	3	1	391	戸
	出稼者数	人 d	24	33	43	99	51	74	63	15	3	1	406	人
	出稼農家率 $\frac{c}{a} \times 100$	%	26.4	25.8	41.6	47.7	40.5	42.5	28.4	14.8	9.7	6.2	33.8	%
	$\frac{d}{b} \times 100$	%	29.6	28.9	37.4	38.7	28.2	27.1	17.7	8.9	5.5	3.3	24.9	%

第2表は総農家戸数、農業従事者数(男子のみ)以下の諸項目と経営耕地規模(階層)とをクロスさせて、38、9両年の比較を試みた統計表である。これで見ると、38年に較べ39年は各階層にわたり、大小の差こそあれ、出稼者数は増大し、出稼農家率も高まっている。注目すべきは、1.5町歩以上の層からの出稼がみられることである。

次に、県全体、置賜地域、和郷村と三者を対照させて出稼関係の比較を、昭和39年2月1日の農業基本調査によって試みたい。

第3表にみる如く、三地域とも程度の差は若干みられるものの、出稼の時期

(16)

第3表 出稼者数および時期、期間、出稼先 (昭和39年2月1日調査)

	出稼者のいる農家数	出稼者総数	出稼の時期			出稼の期間			出稼先					
			秋～春	春～秋	年2回以上	～3ヶ月	3～6ヶ月	6ヶ月～	北海道	関東	関西	北陸	その他	県内
山形県	27,516	30,866	27,058	2,362	1,446	4,372	21,485	5,009	1,610	24,267	2,592	425	945	1,027
置賜地域	6,346	6,863	6,411	139	313	1,386	4,931	546	45	5,803	439	117	159	300
和郷村	391	406	375	9	22	116	267	23	1	367	13	1	2	22

第4表 出稼の経路、増加率、出稼農家率、1戸当り出稼者数

昭和39年2月1日調査

	出稼の経路			出稼者総数			出稼農家率	1戸当り出稼者数(人)
	職安	縁故者	世話人	昭和37年(人)	昭和39年(人)	37年対比(37=100)		
山形県	4,588	15,220	11,058	20,372	30,866	151.5	23.8	1.12
置賜地域	670	3,903	2,290	5,411	6,863	126.8	23.9	1.08
和郷村	14	251	141	355	406	114.4	33.8	1.04

は秋から翌春にかけてが、出稼の期間は3～6ヶ月が、出稼先は県外、殊に関東地方が圧倒的に多いことが雄弁に物語られている。

第4表の出稼の経路においては、三地域とも職安を通じる者はかなり低率であるが、和郷村の場合は極端に少く、逆に縁故者を通じての者が非常に多数であることが示されている。また、和郷村の場合、1戸当り出稼者数はやや低いが、出稼農家率は三地域の最高を示している。

第5表の出稼者の世帯上の地位別分類にみられる如く、総数においては、三地域とも、あとつぎ(長男)が最大多数で、世帯主がこれに次ぎ、両者の出稼が圧倒的に多いことを示している。このことは、農家の2,3男は既に殆ど他出してしまっており、もはや農村には残っていないことを如実に示している。ただし、農業主農家(専業農家, 第一種兼業農家)の場合は、三地域とも、あとつぎの出稼者の方が世帯主のそれよりもやや多く、これに対して兼業主農家(第二種兼業農家)の場合は、逆に世帯主の方があとつぎよりも多数になって

第5表 出稼者の世帯上の地位別人数 昭和39年2月1日調査

	農家数	総 数				農 業 主				兼 業 主			
		出 稼 者 数 (人)				出 稼 者 数 (人)				出 稼 者 数 (人)			
		総数	世帯主	あ と つ ぎ	そ の 他	総数	世帯主	あ と つ ぎ	そ の 他	総数	世帯主	あ と つ ぎ	そ の 他
山形県	25,980	29,043	11,541	11,759	3,743	22,941	8,626	11,766	2,549	6,102	2,915	1,993	1,194
置賜地域	5,809	6,256	2,724	2,946	581	5,280	2,155	2,645	480	976	569	301	106
和郷村	352	364	143	199	22	321	117	185	19	43	26	14	3
(備考)		農業主農家数				兼業主農家数							
	山形県	20,985				4,995							
	置賜地区	4,925				883							
	和郷村	310				42							

おり全く対照的である。これは農業主農家における経営主である世帯主の農業経営に対する執着と責任感の現われと推察できる。

次に、和郷村役場調査の「昭和38年度秋冬期における季節出稼者の実態」を紹介することにする。この調査は38年11月末日現在と39年1月末日現在で調査した229名について取纏め分析したもので、この調査に漏れたものが、その後各部落長の報告により378名あることが判明した、とある。

1. 男 女 別 調

総 数	男	女
229人	224人	5人

2. 職 業 別 調

職 業 別	農 業	商 業	日 雇	大 工	計
出 稼 者 数	213人	3人	12人	1人	229人

農家の出稼者が大部分を占めている。これは村の職業構造からみて当然のことではあるが、他の職業に比べ低所得であり、特に経営耕地の少ない農家にとっては、出稼収入によらなければ生計を維持し得ない状態にあることは、いなめ

(18)

ない事実である、と指摘する。

3. 世帯における地位別出稼者

世帯における地位別	世帯主	長男	2男	3男	4男	孫	計
出稼者数	74人	132人	10人	5人	2人	1人	229人
率	32.31%	57.64%	4.36%	2.18%	—	—	

長男が過半数を占め、世帯主がこれに次いでいる。すなわち、一家の経済的支柱となっている者の出稼が圧倒的多数であることが示されている。これは国の高度経済成長政策の下、次三男の都市産業への流出によって村内の農業就労者の形態が変貌したことを意味する。

4. 農家出身出稼者の耕作規模別

耕作反別	1~3反	3~5反	5~7反	7反~1町	1~1.2町	1.2~1.5町	1.5~2.0町	2.0~2.5町	2.5~3.0町	3町以上	計
率(%)	5.9	7.9	10.7	24.3	12.5	18.1	15.9	3.6	0.7	0.2	100.0

これによってみると、7反~1町層が24.3%と最高位を占め、以下1.2町~1.5町層、1.5町~2町層と比較的高い%を示している。以上を~5反、5反~1町、1町~1.5町、1.5町~2町、2町以上層の5つに類別すれば、~5反層が13.8%、5反~1町層が35%、1町~1.5町層が30.6%、1.5町~2町層が15.9%、2町以上層が4.5%となり、5反~1町層と1町~1.5町層が圧倒的な%を示していることがわかる。しかも、1.5町~2町層もかなりの%を占めていることが注目される。これは農民層の両極分解の分解基軸の上昇化を示すものとも受取れる。

5. 地域別出稼先

出稼の地域別については、東京、横浜の両都市を中心とした関東が群を抜き、全体の84.7%を占め、次が東海の10.4%で、関西、東北の順で、特異なものでは北海道が1名となっている。

6. 出稼先の職種別

職 種	建 設	化学工業	商 業	そ の 他	計
出 稼 者 数	140人	16人	20人	53人	229人
率	61.10%	6.90%	8.70%	23.20%	100.00%

職種別では上表に示す如くであるが、季節短期の就労のため、単純、非熟練労働が過半数を占めているのはいうまでもなからう。

7. 出稼の期間

出稼の期間	1ヶ月	2ヶ月	3ヶ月	4ヶ月	5ヶ月	5ヶ月以上	不 明	計
出 稼 者 数	8人	36	54	79	35	4	13	229
率	3.4%	15.7	23.5	34.4	15.2	1.7	5.6	100.0

当村においては3～4ヶ月の比較的短期の出稼が圧倒的に多く、3ヶ月と4ヶ月両方を合せれば133人と全体の57.9%と過半数を占めていることがわかる。

8. 出稼のあっせん者

あっせん者	職 安	友人・知人	親 戚	そ の 他	計
出 稼 者 数	18人	128人	18人	65人	229人
率	7.8%	55.8%	7.8%	23.3%	100%

出稼のあっせんについては、当村としても極力職業安定所を経てするように指導しているにもかかわらず、依然としてその数は少ない。これは安定所を通すと出稼先と所得がはっきりつかまれ、税金が多くかかってくることを恐れたり、また手続が面倒であるなどの理由が挙げられる。多いのは友人、知人のあっせんであり、55.8%と過半数に達している。なお、その他のうち直接というのが10名おり4.3%を占めている。

9. 留守家族の状態

(20)

(1) 家族数

家族数は、村の平均家族数である5.2人のところが一番多く、4人～6人のものが155人で67.6%、次いで1人～3人が54人で23.5%、7人以上というのが20人で8.7%である。

(2) 妻帯者

出稼者のうち妻帯者は161人あり、出稼者数の3分の1以上を数える。

(3) 子供の数

妻帯者のうち、子供のある者が149人で1人有る者が30人、2人の者が68人、3人の者が40人、4人の者が10人あり、5人以上ある者が1人となっている。

以上が和郷村全体の季節出稼者の実態である。

次に、われわれが選定した調査地域は、先にも触れた如く、蒲生田、法師柳、

部落名	蒲生田	法師柳	坂井	萩生田	長瀬	若狭郷屋	西落合	中落合
世帯数	71	43	39	49	28	62	14	14
人口	393	225	231	293	157	282	80	80

昭和39年9月末日現在 和郷村役場調べ

部落名	出稼農家	
	調査数	調査不能
蒲生田	34	
法師柳	23	2
坂井	21	3
萩生田	16	
長瀬	8	3
若狭郷屋	9	
落合	4	1
合計	115	9

(注) 西落合、中落合の両部落は世帯数も少く、出稼農家も僅少なので、一括して落合として分類した。

坂井、萩生田、長瀬、若狭郷屋、西落合、中落合の8部落である。8部落の世帯数および人口を記せば上表の如くである。

次に、出稼者を出している農家の調査数を部落別に示すと左の通りである。

そこで、以上8部落の出稼農家全戸について行ったわれわれの調査結果を以下に紹介することにしよう。もっとも、それぞれ部落別に集計を行ったのであるが、格別有意差が認められないので、部落別の統計を掲げても特に意味があるとは思えないので、すべて割愛することにした。

[A] 出稼農家についての調査

I 出稼に対する態度, 意識

1. 出稼者の家族内における地位

先の和郷村調査結果にも見られた如く、当然のことながら、次三男は極めて少く、長男と世帯主が圧倒的に多く、両者を合わせれば実に全体の

	父	世帯主	長男	次三男	その他	合計
全体	7.8	31.0	50.8	6.0	4.4	100.0(116)
～5反	8.3	37.5	37.5	8.3	8.3	100.0(24)
5～10反	10.2	32.2	50.8	5.1	1.7	100.0(59)
10～15反	3.3	23.3	63.4	3.3	6.7	100.0(30)
15～20反		33.3	33.3	33.3		100.0(3)

81.8%に達することがわかる。耕地面積別にみれば、1.5～2町層は別として、世帯主の場合、耕地面積が大になる程、出稼率は漸次低下し、長男の場合は逆に急上昇する傾向が見られる。これは世帯主の場合、経営の責任者として当然の現象とみることができよう。5～10反層の出稼者数が最も多く、出稼率は50.9%と高く、1～1.5町層、5反未満層がこれに次いでいる。これは先の和郷村調査結果に現われた傾向と大体合致している。

(注) 調査数は全体で115人であるが、5～10反層に出稼者を2人出している家があり、従って、ここでは合計が116人となっているのである。

2. 出稼の継続性

毎年の出稼が多く、全体の46.1%と約半数あることを示している。また、耕地面積の少い程、出稼は毎年の割合が高く、逆に耕地面積の大きい程、

	毎年	大体毎年	時々	一度だけ	合計
全体	46.1	17.4	22.6	13.9	100.0(115)
～5反	58.3	12.5	16.7	12.5	100.0(24)
5～10反	55.2	17.2	19.0	8.2	100.0(58)
10～15反	26.7	20.0	33.3	20.0	100.0(30)
15～20反	33.3	33.3	33.3		99.9(3)

(22)

「大体毎年」から「ときどき」の%が高くなる傾向がはっきりでている。これは、零細農ほど農業収入が少ないので、生計の足しとして毎年の様に出稼せざるを得ない実情にあることを物語るものである。

3. 出稼してからの経過年数

第3表

	1~2年	3~4年	5~6年	7~8年	9~10年	10年以上	合計
全体	31.3	35.3	17.2	2.0	9.1	5.6	100.0(99)

ここでは、出稼の経験「一度だけ」の者16名を除き、「毎年」、

「大体毎年」、「ときどき」出稼する者だけに限り、出稼してから大体何年位いになるかを問うたものである。

出稼ぎは5~6年前より急増し、殊に、ここ3~4年来が圧倒的に多い。3~4年来の合計は全体の66.6%であり、5~6年来の合計は83.8%にも達する。

4. 出稼の形態

「農閑期を利用して」が115人中112人と圧倒的に多く、殆んど全員とみなされる。「求められれば農繁期でもでかける」と答えた者は僅かに2名、「その他」は1名に過ぎず、問題とするに足りない。

5. 農業に対する態度、見方

第4表

	かわった	かわらない	何とも思わない	N. A	合計
全体	9.6	86.9	2.6	0.9	100.0(115)

第4表は出稼後、農業についての態度、見方に変化があったかどうかをみたものである。

「かわらない」が86.9%と圧倒的であるが、「かわった」と答えた者が低率ながら9.6%出ていることに注目すべきであろう。

6. 出稼後の家庭内の空気

第5表

	良くなかった	悪くなかった	どちらとも思わない	分からない	合計
全体	22.6	7.0	68.4	7.0	100.0(115)

「どちらとも思わない」が68.4%と高率であるが、「よくなったと思う」と

答えた者が22.6%も出ていることが注目される。これは出稼収入によって経済的に余裕ができ、家庭内の暗いじめじめした、あるいはとげとげした空気が明るく和らいだためであろうと解釈できる。「悪くなったと思う」は僅かに7%に過ぎないのである。

7. 出稼期間

第6表

	1ヶ月未満	1～3ヶ月	3～6ヶ月	6ヶ月以上	不定	N. A	合計
全体		20.6	68.0	9.6	0.9	0.9	100.0(115)

3～6ヶ月が68.0%と圧倒的に多い。次いで1～3ヶ月が20.6%を占めており、6ヶ月以上は9.6%に過ぎない。当村においても秋の収穫期における機械化と春耕の機械化により、最近の傾向として出稼が長期になりつつあるようであるが、格別長期化の傾向はまだ余り見られない。さすがに1ヶ月未満の短期出稼は一人もいない。

第6表の(1)

	～1ヶ月	1～3ヶ月	3～6ヶ月	6ヶ月以上	不定	N. A	合計
全体		20.6	68.0	9.6	0.9	0.9	100.0(115)
～5反		8.4	70.6	16.8	4.2		100.0(24)
5～10反		32.7	53.4	12.1		1.8	100.0(58)
10～15反		33.3	66.7				100.0(30)
15～20反		33.3	66.7				100.0(3)

長期の出稼(6ヶ月以上)は5反未満、5～10反層に若干見られる。また、5反未満層は3ヶ月以上の出稼が87.4%と圧倒的な高率に達している。

本家、分家の家格による有意差は認められない。〔第6表の(2)参照〕

旧地主層の場合、6ヶ月以上の出稼がみられないのが注目されるが、その他については特別有意差は認められない。これは農地改革の結果、戦前の状況が戦後大きく変化し、旧地主層も出稼ぎせざるを得ない現実に迫られているもの

(24)

と解釈できる。〔第6表の(3)参照〕

第6表の(2)

	～ 1ヶ月	1～ 3ヶ月	3～ 6ヶ月	6ヶ月 以上	不 定	N. A	合 計
全 体		20.6	68.0	9.6	0.9	0.9	100.0(115)
本 家		31.5	62.8	5.7			100.0(35)
分 家		31.9	59.6	6.4		2.1	100.0(47)
そ の 他		18.7	59.5	8.7	3.1		100.0(32)
N. A			100.0				100.0(1)

第6表の(3)

	～ 1ヶ月	1～ 3ヶ月	3～ 6ヶ月	6ヶ月 以上	不 定	N. A	合 計
全 体		20.6	68.0	9.6	0.9	0.9	100.0(115)
地 主		12.5	75.0		3.6		100.0(8)
自 作		21.5	64.1	10.8			100.0(28)
自 小 作		35.0	60.0	5.0			100.0(20)
小 作		31.0	58.6	10.4			100.0(58)
非 農 家				100.0			100.0(1)

8. 出稼する前に、出稼について家族の者と相談したか

第7表

	相 談 す る	相 談 し な い	場 合 に よ っ て は 相 談	そ の 他	合 計
全 体	89.5	6.1	3.5	0.9	100.0(115)

「相談する」が89.5%と圧倒的高率を占めている。

9. 出稼の決定

第8表

	本 人	家 族 の 相 談	世 帯 主	合 計
全 体	42.6	55.6	1.8	100.0(115)

「家族の相談で決める」が55.6%と過半数を占めており、次に「本人が決める」というのが42.6%と可成りの高率を示しているが、これも第7表

と解釈できる。〔第6表の(3)参照〕

と関連させて考察を加えれば、大部分の者が家族と相談の上、最終的に本人が決定するというものであり、可成り民主的な手続きを経て出稼の決定がなされることを物語っている。

10. 出稼先の状況

出稼先や仕事の内容を、「知っている」が92.2%と圧倒的な高率である。年齢層別に見れば、年齢が高まるにつれ、「知っている」者の%が順次僅かながら下り、逆に「知らない」者の%が上っていることに気付く。

次に、出稼先や仕事の内容を知っている者107名について

第10表 出稼先の認知

	知っている	知らない	合計
全体	96.3	3.7	100.0(107)

第12表 仕事の内容についての認知

	知っている	知らない	合計
全体	79.4	20.6	100.0(107)

第14表 賃金についての認知

	知っている	知らない	合計
全体	64.7	35.3	100.0(107)

第9表 出稼先や仕事の内容の認知

	知っている	知らない	N. A	合計
全体	92.2	5.2	2.6	100.0(115)
20代	100.0			100.0(9)
30代	96.4	3.6		100.0(28)
40代	95.2	4.8		100.0(21)
50代	94.4	5.6		100.0(36)
60代	90.4	9.6		100.0(21)

第11表 職種の認知

	知っている	知らない	合計
全体	85.8	14.2	100.0(107)

第13表 労働時間の認知

	知っている	知らない	合計
全体	54.2	45.8	100.0(107)

さすがに出稼先については殆んど全員が認知している。職種や仕事の内容についても大部分の者が認知しているが、労働時間や賃金になると知らない者が可成り増えている。これは当然の傾向といえよう。

11. 家族の者が出稼に出て長いこと家を留守にされることについての反応

「絶対出稼させたくないと思う」=積極的否定=4.4%

「あまり出稼に行っても欲しくない」=消極的否定=38.2%

(26)

「自分は反対だが家のためならがまんする」=消極的肯定=32.2%

第15表 出稼経験から出稼することに対して

	絶対にし て欲しく ない	余りして 欲しくな い	家のため ならがま んする	気にして いない	その他	合 計
全 体	4.4	38.2	32.2	21.7	3.5	100.0 (115)

以上の積極的否定と消極的否定とを加えると42.6%に達し、これに消極的肯定を加えると74.8%という非常な高率に達する。ここにおいて、できることなら、長期に亘って家を留守にして出稼に出て欲しくない主婦の気持が端的に表現されているとみることができる。他方、低率ながら、「気にしていない」層もあることに留意する必要もあろう。

第15表(1) 出稼経験から出稼することに対して

	絶対にし て欲しく ない	余りして 欲しくな い	家のため ならがま んする	気にして いない	その他	合 計
全 体	4.4	38.2	32.2	21.7	3.5	100.0 (115)
20 代		33.4	33.3	33.3		100.0 (9)
30 代	14.3	21.4	35.7	28.6		100.0 (28)
40 代		61.8	23.8	9.6	4.8	100.0 (21)
50 代		38.9	33.3	25.0	2.8	100.0 (36)
60 代	4.8	38.0	28.6	28.6		100.0 (21)

30代においては、「絶対出稼させたくないと思う」が他の年令層に較べ圧倒的に高率であるのが目につく。また、30代と40代の年令層において有意差を若干認めることができる。

本分家別、地主、自作、自小作、小作別とのクロス集計も行ったが、顕著な差を見出すことができないので、次に表を掲げるだけに留めたい。

子供の無い者の場合は、「絶対出稼させたくないと思う」と答えた者は出ていないが、子供の有る者は、さすがに低率ながら5%あること、および、「気

第15表の(2) 出稼経験から出稼することに対して

	絶対にして 欲しくない	余りして欲 しくない	家のためなら がまんする	気にして いない	その他	合 計
全 体	4.4	38.2	32.2	21.7	3.5	100.0 (115)
本 家	2.9	42.9	28.6	22.7	2.9	100.0 (35)
分 家	6.4	31.9	36.2	23.4	2.1	100.0 (47)
そ の 他	3.1	43.8	31.3	21.8		100.0 (32)
N. A		100.0				100.0 (1)

第15表の(3) 出稼経験から出稼することに対して

	絶対にして 欲しくない	余りして欲 しくない	家のためなら がまんする	気にして いない	その他	合 計
全 体	4.4	38.2	32.2	21.7	3.5	100.0 (115)
地 主		37.5	37.5	25.0		100.0 (8)
自 作	7.1	35.8	25.0	32.1		100.0 (28)
自 小 作		35.0	35.0	25.0	5.0	100.0 (20)
小 作	5.2	43.0	34.5	15.6	1.7	100.0 (58)
非 農 家				100.0		100.0 (1)

第15表の(4) 出稼経験から出稼することに対して

	絶対にして 欲しくない	余りして欲 しくない	家のためなら がまんする	気にして いない	その他	合 計
全 体	4.4	38.2	32.2	21.7	3.5	100.0 (115)
子供有り	5.0	38.0	33.0	20.0	4.0	100.0 (100)
子供無し		41.6	33.3	25.1		100.0 (12)

にしていない」者の%も比較的低率であることが、やや注目をひく。

4ヶ月以上の出稼者を出している家庭の場合、「絶対出稼させたくないと思う」の%が比較的高率である反面、「気にしていない」の%も高率であるのは、長期間出稼者を出している家庭の主婦としての気持の対照的な二面性を現わしているものと解釈できよう。

第15表の(5) 出稼経験から出稼することに対して

	絶対にして 欲しくない	余りして 欲しくない	家のためなら がまんする	気にして いない	その他	合	計
全 体	4.4	38.2	32.2	21.7	3.5	100.0	(115)
1～3ヶ月	3.1	43.6	31.2	18.0	3.1	100.0	(32)
3～6ヶ月	2.8	38.7	35.7	21.4	1.4	100.0	(70)
6ヶ月以上	18.2	25.3	18.2	38.3		100.0	(11)
不 定				100.0		100.0	(1)
N. A		100.0				100.0	(1)

12. 出稼の目的

第16表

	生活の たしに する	農機具 購入の ため	文化 製品	観光や 見物	暇が ある	他の人 が行っ ている	その他	N. A	合	計
全 体	55.8	28.3	2.5	1.7	0.9	0.9	5.8	5.0	100.0	(115)

「農業収入が少いので生計の足しとして」が55.8%と過半数を占めており、「耕耘機などの農機具を買うため」が28.3%と高率であり、両者を合わせれば84.1%に達し、他の目的はすべて殆んど取るに足らない。要するに、当地区においても、生活資金や生業資金を得るための出稼が圧倒的であることを雄弁に物語っている。

第16表の(1) 出 稼 の 目 的

	生活のた しにする	農機具購 入のため	文化 製品	観光 見物	暇が ある	他の人 が行っ ている	その他	N. A	合	計
全 体	55.8	28.3	2.5	1.7	0.9	0.9	5.8	5.0	100.0	(115)
20 代	44.5	33.3					11.1		100.0	(9)
30 代	55.1	31.1			3.5		10.3		100.0	(28)
40 代	52.4	38.0	4.8				4.8		100.0	(21)
50 代	60.8	22.4	2.8	2.8			11.2		100.0	(36)
60 代	66.5	23.8		4.8			4.8		100.0	(21)

40代の場合、「農機具購入のため」の%が比較的高率であり、「テレビや冷蔵庫など（文化製品）を買うため」が僅かながら出ている。この40代は別として、年齢層が高くなるにつれ、生活資金獲得型が漸次高率になり、逆に生業資金獲得型が低率化する傾向が見られる。これは年齢層が高まるにつれ、耕耘機その他の新式の農機具を導入するのに消極的になってくるためではないかと解される。また、50～60代には僅かながら「主として観光や見物が目的」の出稼が見出される。

第16表の(2) 出 稼 の 目 的

	生活のため にする	農機具購 入のため	文化 製品	観 光 見 物	暇 が あ る	他の人が行 っている	その他	N, A	合 計
全 体	55.8	28.3	2.5	1.7	0.9	0.9	5.8	5.0	100.0(115)
本 家	52.7	30.5	5.5	2.8			8.5		100.0(35)
分 家	58.2	25.1		2.1	2.1		10.4	2.1	100.0(47)
その他	58.7	22.5	2.9				5.9		100.0(32)
N, A	100.0								100.0(1)

本分家の間に特別な差を見出すことはできないが、どちらかと言えば、分家筋の場合は生活資金獲得型の切実な出稼が多く、本家筋の場合は生業資金獲得型やレジャー型の出稼が比較的多いといえる。

第16表の(3) 出 稼 の 目 的

	生活のため にする	農機具購 入のため	文化 製品	観 光 見 物	暇 が あ る	他の人が行 っている	その他	N, A	合 計
全 体	55.8	28.3	2.5	1.7	0.9	0.9	5.8	5.0	100.0(115)
地 主	66.7	11.1			11.1		11.1		100.0(8)
自 作	53.5	36.6	3.3	3.3			3.3		100.0(28)
自小作	40.0	35.0	5.0	5.0		5.0	10.0		100.0(20)
小 作	61.5	20.0	3.3		1.7		11.8	1.7	100.0(58)
非農家		100.0							100.0(1)

旧地主層の場合、8人のみであり、ケースが少ないので一概に他と比較するこ

(30)

とはできないが、旧自作，自小作層が比較的余裕のある出稼のタイプを示しているのに対して，切実型の出稼の％が高いのが目につく。これはやはり旧地主層の経済的没落を意味するものであろう。

第16表の(4) 出 稼 の 目 的

	生活のためにする	農機具購入のため	文化製品	観光見物	暇がある	他の人が行っている	その他	N. A	合計
全 体	55.8	28.3	2.5	1.7	0.9	0.9	5.8	5.0	100.0(115)
1～3ヶ月	50.0	28.2		3.1	3.1		12.5	3.1	100.0(32)
3～6ヶ月	56.8	31.0	2.7	1.4			8.1		100.0(70)
6ヶ月以上	61.7	38.3							100.0(11)
不 定	100.0								100.0(1)
N. A	100.0								100.0(1)

出稼が長期間になるにつれ，生活資金獲得型と生業資金獲得型の％が共に高まり，レジャー型の％が低下し，6ヶ月以上の長期の出稼の場合には，前二者の型のみに限られ，全く必要に迫られての出稼であることがよく示されている。

13. 出稼の収入（一年間）

第17表

	5万円以下	5～10万	10～15万	15～20万	20万以上	N. A, D. K	合計
全 体	49.5	36.5	3.5			10.5	100.0(115)

約半数の49.5％が5万円以下の収入であり，10万円未満が全体の86％に達する。また，15万円以上は一人も見られない。これは，当地区においては比較的短期の出稼が圧倒的に多いことから当然の結果である。

分家層の場合，5～10万円代が比較的低率であるが，10～15万円代が6.4％と僅かながら注目をひく。〔第17表の(1)参照〕

旧地主層の場合，他の階層と比較して5万円以下の％が最も低く，5～10万円代の％が最も高い（ただし非農家を除く）のが注目されるが，絶対数が僅少なので特別有意差があるとは認めがたい。〔第17表の(2)参照〕

第17表の(1) 出 稼 の 収 入

	5万円以下	5～10万	10～15万	15～20万	20万以上	N.A., D.K	合 計
全 体	49.5	36.5	3.5			10.5	100.0(115)
本 家	51.4	42.9				5.7	100.0(35)
分 家	53.1	31.9	6.4			8.6	100.0(47)
そ の 他	46.8	34.3	3.1			15.8	100.0(32)
N. A	100.0						100.0(1)

第17表の(2) 出 稼 の 収 入

	5万円以下	5～10万	10～15万	15～20万	20万以上	N.A., D.K	合 計
全 体	49.5	36.5	3.5			10.5	100.0(115)
地 主	25.0	50.0				25.0	100.0(8)
自 作	50.0	35.7	3.6			10.7	100.0(28)
自小作	65.0	35.0					100.0(20)
小 作	50.0	32.7	5.2			12.1	100.0(58)
非 農 家		100.0					100.0(1)

第17表の(3) 出 稼 の 収 入

	5万円以下	5～10万	10～15万	15～20万	20万以上	N.A., D.K	合 計
全 体	49.5	36.5	3.5			10.5	100.0(115)
10万円未満						100.0	100.0(1)
10～20万	55.0	30.0	5.0	10.0			100.0(20)
20～30万	45.8	31.3	6.3			16.6	100.0(48)
30～40万	50.0	43.3				6.7	100.0(30)
40～50万	66.7	33.3					100.0(15)
50～60万		100.0					100.0(1)

農業収入10～20万円，20～30万円という低収入の場合，出稼収入10～15万円代が低率ながら若干見られるのは，農業収入を補う意味で当然の現象である。

(32)

14. 出稼収入の使途

第18表

	生活費 に使う	農機具 を買う	文化製 品購入	自動車 オート バイ を買う	貯金	借金 返済	その他	N. A	合計
全 体	56.1	25.8	2.6	4.6		2.6	7.7	0.9	100.0(115)

「家の生活費に使う」が56.1%と過半数を占めており、これと「耕耘機などの農機具を買う」の両者を合計すれば81.9%に達し、更に「借金の返済」を加えれば実に全体の84.5%にも達する。これは出稼の目的の経済的理由と殆んど完全に一致する。ここで特に注目を要することは、「貯金をした」の欄が空白であることである。これは正しく出稼農家にとって貯蓄などする余裕の全くないことを雄弁に物語るものである。

15. 出稼の経路

(1) 第19表 出稼の経路 (職安との関係)

	職安を 通す	職安を通 さない	時によっ てちがう	N. A	合計
全 体	22.2	70.5	6.1	0.9	100.0(115)
20 代		88.9	11.1		100.0(9)
30 代	33.3	63.1	3.6		100.0(28)
40 代	28.6	61.8	4.8	4.8	100.0(21)
50 代	27.8	66.4	5.6		100.0(36)
60 代	23.8	66.6	9.6		100.0(21)

全体として、「職安を通す」者は22.5%と低率であり、「職安を通さない」者は70.5%と相当の高率を示している。職安を通したがらない理由については、先に紹介した和郷村役

場調査の8, 「出稼のあっせん者」の項で述べた通りである。年令層別に見た場合、20代の絶対数は9名と僅少ではあるが、それでも一人も職安を通す者のいないことが特に注意をひく。

(2) 職安を通さないとすればどのような紹介で行ったか。

「村内の知人や友人の紹介」が79%と圧倒的であり、他は「親戚の紹介」が僅かに9.8%見られるに過ぎない。注目すべきは、当地区では「仲介人のあっ

第20表 出 稼 の 経 路

	知人や友人の紹介	出稼先での友人の紹介	親せきの紹介	仲介人のあっせん	その他	合 計
全 体	79.0	2.9	9.8	2.5	6.2	100.0 (81)

せん」が殆んどないことである。

16. 出稼先の職場

「同一の職場」と答えた者が60.8%と過半数であるが、「違う職場」と「決まっていな

第21表

	同 一 職 場	違 う 職 場	決まってい	N.A.D.K.	合 計
全 体	60.8	20.0	14.8	4.4	100.0(115)

い」の両者を合わせるとと34.8%と可成りの高率になる。

17. 賃金未払い、労働災害等の問題についての認知

「最近山形県では、例えば賃金未払いとか労働災害などの出稼者の問題が表面に出てい

第22表 労働災害等の認知 (1)

	知って	聞いた	知ら	N. A	合 計
全 体	34.7	18.3	46.1	0.9	100.0(115)

ますが、あなたはこのようなことを知っていますか」と問うたのに対し、「知っている」と答えた者が僅かに34.7%と全体の約3分の1にしか達せず、「聞いたことがある」を加えて、漸く過半数の53%に達する程度で、他方「知らない」が46.1%と可成りの高率を示し、認知度は余り高くない。その理由としては次

表に示す如く、彼女等の家では、これまでにこのような問題が殆んどなかったからである。

第23表 労働災害などの認知 (2)

	あ る	な い	知ら	N. A	合 計
全 体	2.6	63.5	3.5	30.4	100.0(115)

18. 賃金未払い、労働災害等の問題に対する反応

賃金未払いや労働災害などの出稼者の問題を「知っている」と答えた者16人

(34)

第24表

	他人事と思えない	反省する	何とも感じない	その他	N. A	合計
全体	31.4	25.0	37.4		6.3	100.0(16)

に対して、このような問題についてどのように考えるか、反応をみたものである。「他人

事とは思えない」、「出稼させなければよかったと反省する」、この両者を合計すれば56.3%と一応過半数には達するが、「何とも感じない」とする者が37.4%の高率を示しており、問題に対して比較的冷淡ないし無関心な態度が見受けられる。これもやはり、彼女等の身近かで、まだこのような問題が殆んど起っていないからであろうと考えられる。

19. 県内出稼についての意見

第25表

	条件が同じであれば県内で出稼	同じ条件でも県外が良い	多少条件が悪くても県内で働く	どちらでもよい	本人次第	N. A	合計
全体	70.4	1.7	17.4	2.6	7.0	0.9	100.0(115)

「出稼は主として山形県外に多いようですが、もし将来山形県内に稼働できる工場なり産業なりができたならば、その時あなたはどのようにしたいと思いますか。」の設問に対し、「条件が同じであれば県内で出稼をさせたい」が70.4%、「多少条件が悪くても県内で働く」が17.4%、とにかく県内で働かせたいと希

第25表の(1)

	条件が同じであれば県内で出稼	同じ条件でも県外が良い	多少条件が悪くても県内で働く	どちらでもよい	本人次第	N. A	合計
全体	70.4	1.7	17.4	2.6	7.0	0.9	100.0(115)
～5反	75.0		12.4	4.2	4.2	4.2	100.0(24)
5～10反	72.5	1.7	15.5	1.7	8.6		100.0(58)
10～15反	60.0	3.3	26.7	3.3	6.7		100.0(30)
15～20反	100.0						100.0(3)

望している意味で両者を合計すれば87.8%という圧倒的高率に達する。すなわち、大部分の主婦は何も好き好んで遠く県外へ出稼ぎさせているのではないという気持が明確に出ている。

1町～1.5町層において「多少条件が悪くても県内で働きたい」が26.7%と比較的高率であるのが目につく。これは、この層においては多少経済的な裕りがあるためと考えられる。

第25表の(2)

	条件が同じであれば県内で出稼	同じ条件でも県外が良い	多少条件が悪くても県内で働く	どちらでも良い	本人次第	N. A	合計
全 体	70.4	1.7	17.4	2.6	7.0	0.9	100.0(115)
20 代	77.7		22.8				100.0(9)
30 代	67.8	7.2	10.7	3.6	10.7		100.0(28)
40 代	80.9		14.3		4.8		100.0(21)
50 代	69.5		19.4	2.8	8.3		100.0(36)
60 代	61.9		23.7	4.8	4.8	4.8	100.0(21)

20代は全員県内を希望している。「同じ条件でも県外が良い」と答えた者は僅かではあるが30代に限られており、また、「本人次第」という答えも30代において最も高率である。

20. 非出稼家庭からどのように見られていると思うか

「何とも思われていない」が73.9%と圧倒的に高率であり、「けいべつされている」は

第26表

	感心だと思われている	軽べつされている	余り良くないと思う	何とも思われていない	分らない	合計
全体	8.7		7.8	73.9	9.6	100.0(115)

全然なく、本地区においては出稼が殆んど当り前のこととして受取られていることがわかる。

Ⅱ 出稼の社会的影響

21. 出稼と家の問題（家の中心になる人が出稼することによる問題）

第27表

	問題がある	問題はない	D. K	N. A	合計
全体	15.7	79.1	3.5	1.7	100.0(115)

第27表の(1) 出稼ぎと家の問題

	問題がある	問題はない	D. K	N. A	合計
全体	15.7	79.1	3.5	1.7	100.0(115)
～5反	16.7	75.0	8.3		100.0(24)
5～10反	15.5	79.3	1.7	3.5	100.0(58)
10～15反	13.3	83.4	3.3		100.0(30)
15～20反	33.3	66.7			100.0(3)

「問題はない」が79.1%と可成りの高率であり、「問題がある」と答えた者は僅かに15.7%と低率である。以上から、出稼のもたらすマイナス面についての主婦の意識の低さがうかがわれる。

1.5～2町層は別として、耕地面積が大きくなるに従い、「問題がある」の%は漸減し、逆に「問題はない」の%は漸増の傾向を示している。

22. 出稼による家の問題点（「問題がある」と答えた21名に対する設問）

第28表

	1	2	3	4	5	6	N. A	合計
全体	33.3	14.3	9.5	9.5	23.8	4.8	4.8	100.0(21)
(備考)	1 家のしまりがなくなる				4	4 家庭内が暗くなる		
	2 子供の教育やしつけに困る				5	5 百姓仕事が進まない		
	3 部落の行事や運営がうまくいかない				6	6 その他		

「男手が欠けて家のしまりがなくなる」=33.3%、「百姓仕事が進まない」=23.8%、「子供の教育やしつけに困る」=14.3%が主要な問題点として挙げられる。

23. 男手の出稼による女の百姓仕事の負担

全体としては、「変わらない」とする者が55.7%で過半数を占めているが、「やや重くなった」とする者が33.9%と可成りの高率を示している。

第29表

	大変重くなった	やや重くなった	変わらない	N. A	合計
全 体	7.8	33.9	55.7	2.6	100.0(115)

耕地面積別にこれを見れば、耕地面積が大きくなる程、女性の負担が大なり小なり重くなる傾向がはっきりと出ている。

第29表の(1) 女の百姓仕事の負担

	大変重くなった	やや重くなった	変わらない	N. A	合計
全 体	7.8	33.9	55.7	2.6	100.0(115)
～5反	4.2	20.8	45.7	8.3	100.0(24)
5～10反	10.5	34.4	55.1		100.0(58)
10～15反	6.7	40.0	50.0	3.3	100.0(30)
15～20反		66.7	33.3		100.0(3)

年齢層別にこれを見れば、20代の女性の負担増が目立っている。

第29表の(2) 女の百姓仕事の負担

	大変重くなった	やや重くなった	変わらない	N. A	合計
全 体	7.8	33.9	55.7	2.6	100.0(115)
20 代	11.1	55.6	33.3		100.0(9)
30 代	7.2	25.0	67.8		100.0(28)
40 代	14.3	28.6	57.1		100.0(21)
50 代	8.3	35.0	50.1	5.6	100.0(36)
60 代		38.1	57.1	4.8	100.0(21)

これは調査対象の代りにされた娘や嫁の層に当ると考えられ、彼女等に大きく皺寄せられたものと解すべきであろう。30代以上は年齢

層が高まるにつれ、負担が大なり小なり重くなり、「変わらない」とする者の%が逆に減少している。

24. 女の百姓仕事が増えたことについての反応 (「大変」ないし「やや重くなった」と答えた者48名が対象)

仕事が増えたことについて、「やむをえないと思う」が54.1%で過半数を占

(38)

第30表

	1	2	3	4	N. A	合 計	(備考)
全 体	6.3	54.1	14.6	18.7	6.3	100.0(48)	1 困ったことだと思う 2 やむをえないと思う 3 あきらめている 4 当然のことと思う

め、「当然のことと思う」=18.7%、「あきらめている」=14.6%を加えれば、女性の負担の増加を甘受ないし諦観している者は全体の実に87.4%に達することになる。

25. 出稼先からの便り

第31表

	よこす	よこさない	N. A	合 計
全 体	92.2	6.0	1.8	100.0(115)

第32表 一ヶ月間のたより

	1～2通	3～4通	5通以上	合 計
全 体	75.7	22.4	1.9	100.0(107)

父や夫や長男の92.2%は便りをよこすが、「よこさない」が6%あることにむしろ注目すべきであろう。これらがとかく行方不明等の問題を起し易いのであるから。

第32表は、便りを「よこす」と答えた者107人を対象としたものである。

25. 行方不明事件について

第33表 行方不明事件についての認知

	知っている	知らない	合 計
全 体	73.0	27.0	100.0(115)

「秋田県や山形県では出稼に出かけて、そのまま家族を捨てて帰ってこなかったり、行先不明になったりする人がかなりおりますが、あなたはこれらのニュース

を知っていますか。」という設問に対し、「知っている」と答えた者が73.0%で

第34表 行方不明事件への反応 (ニュースを知っている者86名を対象)

	信じられなかった	こわいと思った	何とも思わなかった	困った事だと思った	N. A	合 計
全 体	4.7	16.3	5.8	69.7	3.5	100.0 (86)

一応高率ではあるが、認知度は余り高いとはいえない。

第34表においては、「困ったことだと思った」が69.7%と圧倒的高率であり、「こわいと思った」が16.3%を占めており、殆んどの者がショックを受けている。

第35表 事 件 後 の 対 策 (同上)

	出稼をやめさせる	出稼をやめさせない	相談する	考えていない	その他	N. A	合 計
全 体	19.8	6.9	25.7	12.9	6.0	29.7	100.0(86)

「もしあなたの近くでそのようなことがおこったら、あなたの家ではどうなさいますか。」の設問に対し、無回答が29.7%も出ているが、突然の質問で即答できなかつたものと考えられる。さすがに、この設問はショックとして受止められ、「よく相談して対策をねる」=25.7%、「出稼をやめさせる」=19.8%が比較的高率を示しているが、それでもなおかつ、「出稼はやめさせない」が低率ながら6.9%出ていることに注目を払う必要がある。これは、あくまで出稼をせずには生きていけない悲惨な農民の姿を端的に物語るものであろう。

27. 出稼農家と非出稼農家の対立

「対立がなかった」と答えた者が90.4%で圧倒的である。耕地面積別では、5～10反層に「対立があった」とする者が12.1%出ており注目をひく。

第36表 部 落 内 で の 対 立

	対立があった	対立がなかった	忘れた	N. A	合 計
全 体	7.8	90.4	—	1.8	100.0(115)
～5反		95.8	—	4.2	100.0(24)
5～10反	12.1	87.9	—		100.0(58)
10～15反	6.7	90.0	—	3.3	100.0(30)
15～20反		100.0	—		100.0(3)

第37表 対立の内容 (「対立があった」と答えた者12名を対象)

	農作業のこと	共同作業のこと	消防のこと	部落役員のこと	その他	合 計
全 体	16.7	8.3	41.7	33.3		100.0 (12)

(40)

「主としてどういう対立ですか」との設問に対し、「消防のことで」と「部落役員のこと」で」と答えた者の%が比較的顕著である。当地区においては、出稼が今のところ、まだ比較的短期間であるためもあって、対立の件数も僅少に留まっていると考えられるが、家の中心になっている男手が多数出稼することにより、部落に残っている少数の男子や婦人に、火災の多いしかも積雪で消防活動がままにならない冬の農閑期に、部落の消防作業や、部落の役員が皺寄せされて押付けられる結果になるところから、両者の対立が必然的に起ってくるのである。

28. 父や夫が出稼に出て家を留守にされて子供が淋しがったりしたことは

第38表 子供が淋しがること

	ある	ない	N. A	合計
全体	45.2	44.4	10.4	100.0(115)

あるか

「ある」と「ない」と答えた者がほぼしている。

29. 農 業 観

(1)

第39表 農業について

	馬鹿らしい	安定して良い	何とも言えない	分からない	合計
全体	27.0	46.1	21.7	5.2	100.0(115)

「あなたは出稼の収入から考えて農業というものをどう思いますか。」の設問に対して「農業は安定しているからいいと思う」が、さすがに46.1%

と半数近く出ているものの、他方、「何とも言えない」が21.7%,更には、「農業は馬鹿らしい」が27.0%

第39表の(1) 農業について

	馬鹿らしい	安定して良い	何とも言えない	分からない	合計
全体	27.0	46.1	21.7	5.2	100.0(115)
20代	22.2	55.6	11.1	11.1	100.0(9)
30代	32.2	32.2	35.6		100.0(28)
40代	19.0	52.4	28.6		100.0(21)
50代	27.8	55.6	13.8	2.8	100.0(36)
60代	33.3	33.3	14.3	19.1	100.0(21)

は馬鹿らしい」が27.0%と、可成りの高率を示していることに注目する必要がある。この現象は農業収入の低さを物語るものであろう。年令層別に農業観をみてみると、特に30代

の場合、「農業は安定しているからいいと思う」が僅かに32.2%と最も低く、他方、「何ともいえない」が35.6%、「農業は馬鹿らしい」が32.2%と60代と共に可成りの高率を示している点が注意をひく。また60代の場合、「わからない」層が19.1%と比較的高率であるのが目につく。総体的に見て、年齢層毎に

可成りの差を見出すことができる。

総体的に見て、主婦は農業は安定していいと思っている者が46.3%と半数近く、比較的高率であるが、嫁、娘、「その他」は「農業は馬鹿らしい」か「何

ともいえない」の%が比較的高く出ている。

表によって明らかに見られるように、本家、分家、「その他」の差が明瞭に出ている。

旧自小作層の場合、農業は安定していいとする者が70.0%と圧倒的に高率であるのが特に目につく。また、旧自作層の場合、「農業は馬鹿らしい」とす

第39表の(2) 農業について

	馬鹿らしい	安定して良い	何ともいえない	分からない	合計
全 体	27.0	46.1	21.7	5.2	100.0(115)
主 婦	25.3	46.3	23.1	5.3	100.0(95)
嫁	27.3	36.3	27.3	9.1	100.0(11)
娘	66.7	33.3			100.0(3)
その他	50.0	33.5	16.5		100.0(6)

第39表の(3) 農業について

	馬鹿らしい	安定して良い	何ともいえない	分からない	合計
全 体	27.0	46.1	21.7	5.2	100.0(115)
本 家	11.4	57.1	28.6	2.9	100.0(35)
分 家	31.9	44.7	21.3	2.1	100.0(47)
その他	34.4	37.4	15.7	12.5	100.0(32)
N. A	100.0				100.0(1)

第39表の(4) 農業について

	馬鹿らしい	安定して良い	何ともいえない	分からない	合計
全 体	27.0	46.1	21.7	5.2	100.0(115)
地 主	12.5	37.5	37.5	12.5	100.0(8)
自 作	39.2	35.7	21.5	3.6	100.0(28)
自小作	15.0	70.0	15.0		100.0(20)
小 作	29.3	41.4	22.4	6.9	100.0(58)
非農家		100.0			100.0(1)

(42)

る者が39.2%と可成りの高率を占めている点、旧地主層の場合、絶対数は8人と僅少なから、「何ともいえない」と答えた者が37.5%あるのが注目される点である。

第39表の(5) 農業について

	馬鹿らしい	安定して良い	何ともいえない	分からない	合計
全体	27.0	46.1	21.7	5.2	100.0(115)
10万未満				100.0	100.0(1)
10~20万	15.0	55.0	25.0	5.0	100.0(20)
20~30万	35.4	29.2	27.1	8.3	100.0(48)
30~40万	30.0	53.3	16.7		100.0(30)
40~50万	20.0	66.7	13.3		100.0(15)
50~60万		100.0			100.0(1)

年間の農業収入20~30万円層の場合、他の層と異り、特異な傾向を示している。すなわち、「農業は安定しているからいいと思う」が僅かに29.2%と最低であり、反面、「農業は馬鹿らしい」と思う

者が35.4%、「何ともいえない」が27.1%とそれぞれ最高を示している。この20~30万円層を別とすれば、農業収入が高まるにつれ、農業は安定していて良いと思う者の%が漸次高まる傾向が見られるが、これは当然の結果と見做すことができよう。

(2)

第40表 農業について

	出来ればやめたい	やめられない	やめない	考えた事がない	分からない	合計
全体	16.1	64.5		12.9	6.5	100.0(31)

「農業は馬鹿らしい」と答えた人31名が対象。

「その場合あなたは農業をやめたいと思いますか。」の設問に対し、農業は馬鹿らしいと思いつつも、その64.5%は「やめたくともやめられない」と答えている。要するに「やめない」のではなく、「やめられない」という現実の厳しさを主婦達は肌を感じているのである。

30. 現在の生活についての満足度

第41表

	満 足	余り満足 でない	不満足	N. A	合 計
全 体	60.9	32.2	6.0	0.9	100.0(115)

31. 一戸の出稼人員

出稼人員は1戸から2人が2件
1.7%に過ぎず、1戸から1人が
殆んど全部である。

第42表

	一 人	二 人	三人 以上	N. A	合 計
全 体	97.4	1.7		0.9	100.0(115)

32. 出稼と仲間

出稼に行く場合、
「仲間と一緒に」が圧倒
的に多い。

第43表

	一 人	仲間と一 緒	N. A	合 計
全 体	20.0	79.1	0.9	100.0(115)

33. 送金の仕方

第44表

	定期的に	不定期的 に	送金して こない	N. A	合 計
全 体	53.9	20.9	21.7	3.5	100.0(115)

34. 出 稼 先

(1)

第45表 出 稼 先

	東京	千葉	神奈川	静岡	愛知	北海道	大阪	長野	埼玉	N. A	県内	不定	合 計
全 体	58.5	3.4	14.4	8.5	2.5	0.9	1.7	0.9	1.7	2.5	2.5	2.5	100.0(118)

東京がさすがに58.5%と過半数を占め、他の府県を断然引離している。神奈川県、次いで静岡県が多少目につく程度である。遠くは大阪や北海道への出稼も見られる。県内への出稼は2.5%と極めて僅少である。

(44)

(2) 第46表 出 稼 先 の 職 種

	土木 建築	運転士	工員	店員	飲食店	行商	農業	技師	運搬員	不定	N. A	合 計
全 体	50.3	4.3	8.6	16.2		0.9	5.1	3.4	5.1	0.9	5.1	100.0(117)

土木建築が50.3%と約半数を占めて圧倒的に多く、店員が16.2%、次いで工員が8.6%と多少目につく程度である。

(註) (1), (2)とも、1戸から2人出稼したものも含まれているので合計が多くなっている。

35. 出 稼 観

第47表 出 稼 観 (プラス・マイナスを総合して)

	良いと 思う	余り良い と思わぬ	良いと 思わぬ	N. A	合 計
全 体	15.2	54.5	21.2	9.1	100.0(66)

(注) ここでは蒲生田、若狭郷屋、法師柳3部落のみの集計である。

出稼のもたらすプラスの面とマイナスの面とを考え合せて、それでもなお出稼はよいと思うかを問うたのである。

「あまりよいとは思わない」が54.5%と過半数を占め、「よいとは思わない」とする者が21.2%あり、多かれ少なかれよいとは思わない者は75.7%にも達する。

36. 県や国に対する要望

第48表

	農業で 生活する に	県内に 働く場所 がほしい	農閑期に 屋内で できる 仕事	生活を 保障する もの をつ つてほ しい	意見 なし	考 え も 考 え ほ しい	出稼の ことを とって ほ しい	N. A	D. K	集 団 で け る よ う に	条 件 を よ く し て ほ しい	ど う も よ い	合 計
全体	3.4	15.4	0.9	2.6	11.1	1.7	37.5	23.0	1.7	0.9	0.9	0.9	100.0(117)

フリー・アンサー方式を採用したので、上表のように類型化した。「出稼のことをもっと考えてほしい」が37.5%と他を引離して最高の率を占め、次いで、「県内に働く場所がほしい」が15.4%出ている。一方、「意見なし」が11.1%、

無回答が23.0%と可成りの率を占め、また、低率ながら、「考えても仕方ない」とか「どうでもいい」という回答も見られる。これらは農家の主婦の政治に対する意識の低調さを雄弁に物語るものである。

〔B〕 非出稼農家についての調査

出稼者を出していない農家の調査については、調査能力の限界も考えて、上記8部落のうち、最も多く出稼者を出している部落、従ってまた、出稼率の高い蒲生田、坂井、法師柳の3部落の非出稼農家全戸に限定して調査を行った。非出稼農家の調査数を部落別に示せば右の通りである。

非出稼農家 部落名	調査数	調 査 不 能
蒲 生 田	26	
坂 井	11	
法 師 柳	12	2
合 計	49	2

1. 親類、知人や付近の人の出稼者の有無

「あなたの親類、知人や付近の人で出稼に行かれたことのあるかたはいますか」という設問。

第1表 親類・知人の出稼者の有無

	い る	い ない	合 計
全 体	78.8	21.2	100.0 (47)

2. その人から出稼について何か聞かされたか

1, で「いる」と答えた37名についての設問である。「聞いた」者が51.2%と半数に過

第2表

	聞 いた	聞 かない	聞 いた か ど う か 忘 れ た	合 計
全 体	51.2	46.1	2.7	100.0(37)

ぎず、聞いていない者が案外に多い。

3. 出稼についての印象

(1) (「聞いた人」19名が対象)

「出稼もよいものだった」が36.9%で最高率である。「特別な印象はも

(46)

第3表

	出稼もよいものだった	出稼はつらい	特別な印象なし	出稼はこわい	その他	合計
全体	36.9	10.5	21.0		31.6	100.0(19)

たなかった」が21.0%、「出稼は農業よりもつらいものだった」が10.5%出ているが、

「出稼はこわいものだ」と思ったは一人も出なかった。

(2) (1)において「出稼もよいものだった」と答えた者7名を対象にして、「その場合、もしすすめられれば、自分の家でも出稼させてもよいと思いましたが。」

第4表

	よいと思った	よいとは思わなかった	N. A	合計
全体	42.8	42.8	14.4	100.0 (7)

「よいと思った」と「よいと思わなかった」が共に42.8%で相半ばしている。

以上、(1)と(2)の結果から、非出稼家庭の主婦は、出稼に対して、いささか批判的であり、可成り消極的と見受けられる。

4. 村内の出稼者の出稼の目的は何だと思うか

第5表 出稼の目的

	生活の為に	遊びの為に	農機具を買う為に	その他	分からない	合計
全体	53.5	1.8	33.9	5.4	5.4	100.0(56)

「生活のため」が53.5%と過半数を占め、次いで「農機具を買うため」が33.9%と可成り

の高率を示しており、他は殆んど問題にならない程の低率である。これは出稼農家の出稼の目的(第16表)の調査結果と全くとっていい程良く符合している。なお、表には出さなかったが、「テレビや洗濯機を買うため」と「貯金するため」の項は1件も出なかった。

5. 出稼収入の使途

出稼からの収入は主として「生活費に」使われているとする者が43.7%、「農機具購入に」使われていると答えた者が42.2%といづれも高率であり、他は極

第6表

	生活費	遊 び	農機具	電化品	貯 金	その他	D. K	N. A	合 計
全 体	34.7		42.2	1.6	3.1	3.1	4.7	1.6	100.0(64)

めて低率で問題にならない。これは出稼農家の出稼収入の使途（第18表）の調査結果と大体対応している。

6. 出稼農家に対する反応

第7表

	うらやましい	必要ない	当 然	生活上やむをえない	何とも思わない	合 計
全 体	2.1	21.2	17.2	53.1	6.4	100.0 (47)

「生活上やむを得ないと思う」という消極的出稼肯定者が53.1%と過半数を占めており、これに「暇があるのだから当然だと思う」と答えた積極的出稼肯定者は17.2%あり、両者を合計すれば70.3%という圧倒的高率に達する。他方、

「それまでする必要はないと思う」という出稼否定者は21.2%と比較的高率出ているのが特に注目される。

7. 出稼をしない理由

第8表

	暇がない	農業で十分生活できる	重労働がつらい	出稼先が県外だから	家族がかわいそう	出稼はばからしい	その他	D. K	合 計
全 体	33.3	22.9	2.1	6.3	2.1	2.1	29.1	2.1	100.0(48)

「暇がないから」という者が33.3%で最高であり、次いで、「その他」が29.1%も出ており、「農業だけで十分生活できるから」と答えた者が22.9%と高率、その他の理由としては「出稼先が県外だから」が若干出ている程度で、他は殆んど問題にならない。表には出さなかったが、「事故があってこわいから」と「何となくしたくない」は1件も出ていない。

(48)

8. 家の中心人物の出稼に対する態度

第9表

	家の中心 者の出稼 は悪い	家をささえ る意味で絶 対悪い	男手が欠ける と他人に迷惑 をかける	生活のため やむを得ぬ	D. K	N. A	合 計
全 体	29.8	4.3	14.9	42.5	4.3	2.1	100.0(47)

「生活のためならやむを得ない」と消極的肯定を示す者が42.6%と最高の率を占めているが、他方、「家の中心になる人の出稼はよいことではない」が29.8%と高率であり、「男手が欠けると他人にもいろいろ迷惑をかけるから、してほしくない」と答えた者が14.9%、更に「家をささえる意味からも絶対してはいけない」が僅かながら4.2%出ており、以上の出稼否定の三者を合計すれば、実に48.9%と約半数に達する。

9. 男手の出稼による被害

第10表

	子供	嫁	主婦	老人	家族全部	その他	D. K	N. A	合 計
全 体	8.7	41.6	4.2	6.3	60.8	2.1	13.9	2.1	100.0(48)

男手の出稼で、家族のうち最も被害をうけるのは、さすがに嫁が圧倒的に多く41.6%に達し、次いで「家族全部」が20.8%と高率である。

10. 出稼がひき起す社会問題についての認知

第11表

	よく知っ ている	大体知っ ている	あまり知 らない	全然知ら ない	合 計
全 体	17.2	36.2	25.5	21.1	100.0(47)

「最近、新聞などに
よれば、出稼がいろい
ろの問題をおこしてい
るようですが、あなた

はこれらのニュースを知っていますか。」という設問に対し、「よく知っている」が17.2%、「大体知っている」が36.2%、両者を合わせて多かれ少なかれ知っている者は53.4%と漸く過半数に達するが、出稼農家の場合と同様、認知度は

余り高いとはいえない。

11. それらのニュースを知った時の出稼に対する反応 (ニュースを多かれ少なかれ知っている者25名が対象)

さすがに、「こわいこ

第12表 労働災害について

とだと思った」が40.0%と最高であるが、他

	こわい と思っ た	信じら れない	出稼しな くてもよ かった	驚かな かった	何とも 思わぬ	合 計
全 体	40.0	12.0	8.0	8.0	32.0	100.0(25)

方、「別に何とも思わ

なかった」が32.0%と次いで高率であり、これと「それほどおどろかなかった」=8.0%を加えると40.0%にも達し、出稼農家の場合と同様、ニュースに対して比較的冷淡ないし無関心な態度が見受けられる。

12. 他所の家が出稼で大金をもってきたり、いろいろなものを買うのを見て、気になるか

第13表に見る如くであるが、「気にな

第13表

る」者が法師柳の場合、1人もなく、坂井でも9.1%と殆んど問題にならないのに、蒲生田の場合は「気にならない」者と半々の50%と非常に高率に達しており、この場合は部落差が顕著に表われて

	気にな る	気にな らない	合 計
全 体	29.8	70.2	100.0(47)
蒲 生 田	50.0	50.0	100.0(26)
坂 井	9.1	90.9	100.0(11)
法 師 柳		100.0	100.0(10)

いるので、部落別の表を特に掲げたのである。

13. 出稼で部落の男手が欠けることで、迷惑したり困ったりすること

(1) 「おおいにある」

第14表

と「少々ある」と答えた者、すなわち、多かれ少なかれ迷惑したり

	おおい にある	少々ある	とくにな い	合 計
全 体	6.4	29.8	63.8	100.0 (47)

困ったりした者36.2%，17名を対象として、「それは主としてどういう点ですか」という設問。

(50)

(2) 「消防がマヒする」が44.4%と相当な高率を示している。次いで、「たくさんあ

第15表 出稼農家の増加で困ったこと

	共同作業等負担加重	消防がマヒする	たくさんあっていきれない	その他	N. A	合計
全体	16.6	44.4	27.8	5.6	5.6	100.0(18)

ていきれない」が27.8%、「共同作業や農作業の負担が重くなる」が16.6%となっている。「部落や村の役員を押しつけられる」と答えた者は皆無であり、この点、先に触れた「27, 出稼農家と非出稼農家の対立」の内容と関連させて考察するとき、いささか意外に思われるが、これは恐らく「たくさんあ

14. 出稼前と出稼後とで人柄や態度が変わった人はいるか

第16表

	いる	いない	合計
全体	4.3	95.7	100.0(47)

「いる」と答えた者は全体の4.3%で、殆んど問題にならない。しかし、今後出稼が長期化したり、出稼経験を更に積重ねる場合、事情が変わってくる可能性がある。

15. 将来の出稼について

(1) 第17表

	させないつもり	させることもありうる	D. K	合計
全体	70.2	19.1	10.7	100.0 (47)

ここ当分は「させないつもり」と答えた者が70.2%と大部分である。

(2) 第18表

	絶対にさせない	できるだけさせない	本人しだい	相談して決める	今はわからない	N. A	合計
全体	15.1	25.1	12.2	30.3	6.1	12.2	33

(1)で、ここ当分は出稼「させないつもり」と答えた者33名を対象として、「もしあなたの子供や夫が近い将来出稼をしたいと相談されたらあなたはどうされますか」という設問に対して、それでもなおかつ「絶対にさせない」者が15.1%、「できるだけさせない」が25.1%、「いづれにしても出稼させたくな

いは両者を合して40.2%の高率に達し、「相談して決める」の30.3%を上まわり、(1)、(2)の結果から、非出稼農家の主婦は子供や夫の出稼に対して多分に消極的な態度を示していることがわかる。

16. 現在の生活についての満足度

「大変満足」が12.7%、「大体満足」が59.5%と過半数に達し、程度の差こそあれ「満足」

第19表 現在の生活

	大変満足	大体満足	不満足	合計
全体	12.7	59.5	27.8	100.0 (47)

と答えた者は全体の72.2%と大部分であり、先に触れた30における出稼農家の「満足」60.9%より可成り高い結果が得られたのも当然といえよう。

〔C〕 出稼経験者に対する聴取調査

ケース1, 貧農 30才位い 出稼先は静岡のみかん狩り

(1)大体例年同じ職場。仲間の紹介で一緒に出稼ぎ。

(2)仕事の内容は、みかんを畑地から天びん棒で運搬する重労働である。

(3)出稼の理由

経営規模が小さく(約3反)、百姓では生活が立たないし、それかといって出稼に優る仕事が近隣にない。生活上必要に迫られてであり、決して好んで出稼している訳ではない。

(4)労働条件

重労働のわりには労賃がいいとはいえない。食費、宿泊を除いて2万円位い。毎月1万8千円も送金している。

ケース2, 中農 30才位い 婿養子

(1)出稼しなければ生活できないという程ではない。父母はまだ健在で農業に従事し、生活は比較的安定している。

(52)

(2)東京に妹が嫁いでおり、そういう関係で無理のない職場で働く。

(3)職場は小企業の製造会社であり、同郷の仲間もいる。

(4)送金は父あてでなく、妻あてに送り、時には品物で送る。正月の帰省を楽しみにして働き、帰郷の時には、子供にはオモチャ、妻には一寸した反物などを買ったりする。毎月12,000円～15,000円送金する。

ケース3、貧農(経営耕地4～5反) 42～3才

(1)百姓だけでは生活できないし、出稼ぎは生活上欠かされない。

(2)5～6年前から定期的に出かけ、職場は仲間と一緒に町工場である。

(3)娘は中学校卒業後、近くの工場に勤めており、生活費位いはいれてくれる。

(4)出稼ぎそのものには否定的である。しかし、小農としてはやむを得ないことである。

(5)高度成長下で農業はおきざりにされており、もう農業の時代は終わった。農業と出稼兼務の生活はできれば避けたいし、そのためにも、息子(中学生)には百姓をさせようとは思わない。

(6)送金は毎月2万円位いで、定期的に送る。

(7)妻も近くの工場に働きに行ったり、日雇いをしたりしている。

ケース4、経営規模不明 27～8才 出稼先の職場は横浜近辺の水道等の土木工事

(1)出稼の理由

はっきりしている。それは生活できないからだ。百姓にとっては農業だけで食えることはうれしいことだ。しかし、百姓が農業で出稼の収入分だけ増収することは不可能に近い。それに時間をかけて、2～3年後の収入のために苦勞する余裕さえも百姓にはない。つまり、明日の1,000円よりも今日の100円が百姓の出稼に行く心情なのだ。そこまで百姓は追いつめられている。

(2)職場の生活

職場ではテレビやラジオを見たりで、遊ぶことなどできない。たまにパチン

コするのが精一杯だ。

追記 本調査研究は主として大学院教授研究費によるものである。また本調査がスムーズに行われたのは、和郷村長はじめ役場の方々、各部落長、宿舎を提供して下さった方々の御協力と御好意の賜物であり、深く感謝する次第である。

本調査の企画、実施、集計整理に当っては、終始社会学研究室の田口助手、美ノ谷副手の助力を得た、また調査の実施、集計の段階では学生諸君の労を煩わした。特に記して感謝の意を表したい。